



【表紙写真】

『魔女の宅急便』の原作者・角野栄子さんが館長をつとめる「魔法の文学館（江戸川区角野栄子児童文学館）」いちご色の世界が広がる館内では、たくさんの児童書とともに、“本をひらけば楽しい世界”のメッセージを発信しています。「のんちゃんのお出かけ記」（8頁）で、館内の様子をご紹介しますので、ぜひお読みください。

魔法の文学館（江戸川区角野栄子児童文学館）

〒134-0085 江戸川区南葛西7-3-1 なぎさ公園内
電話 03-6661-3911
【日時指定予約制】入館日時はインターネット予約にて受付。
【営業時間】9:30～17:30（最終入館16:30）
【休館日】火曜日、年末年始（12/29～1/3）
【アクセス】東京メトロ東西線「葛西駅」及びJR京葉線「葛西臨海公園駅」からバス約10分
※各バス停から徒歩5分
※入館料、インターネット予約、アクセスの詳細はWEBサイトをご確認ください。
<https://kikimuseum.jp/>

読者PRESENT

角野作品に登場するキャラクターのブックマーカーを3名様にプレゼント！

応募方法：「氏名」「住所」「年齢」「本誌の感想」をご記入の上、FAX（03-3263-3838）または、応募フォームよりご応募ください。

締め切り：2024年9月13日（金）必着

※キャラクターの種類は、運動本部にお任せください。



応募フォーム

「小さな親切」誌は、季刊発行

春号・5月、夏号・8月、秋号・11月、新春号・1月の予定です

2024年8月1日発行 通巻535号

編集・発行人 鈴木恒夫

発行所 公益社団法人「小さな親切」運動本部
〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-20-4
TEL.03-3263-2866 FAX.03-3263-3838
<https://www.kindness.jp/>

印刷所 広研印刷株式会社
©無断転載禁止 落丁、乱丁はおとりかえいたします。



報恩

理事 ● 中尾根康宏（一般社団法人全国地方銀行協会常務理事）

「なかおねやすむろ」妻と二人暮らし。趣味は読書とスキ、ダイビング、登山を楽しんでいます。

役員リレーエッセイ

「徒然なるままに」

父 父が亡くなったのは、今から8年ほど前である。自分の年齢も関係あるのか、その頃から、アーティストや著名人の訃報が、自分の思い出とリンクするようになった。それまでは、気にも留めなかったのに（ごめんなさい）。そのアーティストの曲を聴いていた中学生の頃、部活の先輩に理不尽な指導を受け、「やめてやる！」と思っていたこと。高校生の冬に、初めて一緒に出掛けた子と、なんとなく気まずくなり、その短調のメロディーがしみていたこと。サラリーマンになりたての頃は、職場の仲間とカラオケに繰り出し、「愛は勝つ！」と叫んでいたこと。米国に留学していた時、昨年亡くなった米国史上初の女性最高裁判事の判決意見について、急に教授に当てられ、フリーズしたこと。

著 名人ではないが、私の母方の祖父は、私が20代の頃に亡くなっている。彼は、私が幼い頃、毎週日曜日に、住居のある赤羽（東京都北区）から、私の住む北千住（同足立区）にバスを乗り継いでやってきて、私を浅草や上野、柴又、あるいは郊外の田んぼでのザリガニ釣りやオタマジャクシ採りに連れ出してくれた。それは街の青果店を営んでいた娘夫婦の子育て支援だったのかもしれないし、私が初孫だったからかもしれない。彼は、先の戦争を生き残り、でも戦争の話をするとはなく、焼き魚は必ず骨や内臓まで食べ尽くしていた。私を叱ることはせず、自由に遊びまわらせてくれたが、安全の確保に気を配ってくれていたと思う。しかし、祖父との習慣は私が小学校に上がり、地元のサッカーチームに入ると、自然消滅した。

そ ういうことを思い返すようになったのも、父の死後である。私も、自分が結婚した時の父と同じ年齢になった。あの時、彼はどのような顔をしていたか、思い出せない。私が入試に合格した時、就職した時も然り。私が生まれた時、売り物の果物や野菜を客にタダで配ったというエピソードは、商店街の大人から聞いたことがある。父は幼い頃に、両親を立て続けに失っている。高校卒業後、いくつかの職を経て、母と結婚をしたのを機に、東京の下町に青果店を開店した。私は、商店街の大人たちにも見守られて育った。その商店街も、すでにない。

亡くなった人への報恩は難しい。とりあえず、父の眠る墓を掃除し、日本舞踊を趣味にしている母の何ともいえない踊りを見に行くことにする。そして、どこまでできるか自信はないが、次世代を見守っていこうと思う。